東洋文庫 912

フマーユーン・ナーマ

ムガル朝皇帝バーブルとフマーユーンに関する回想録

グルバダン・ベギム
間野英二訳注

平凡社

文庫
912

ーユーン・ナーマ

ムガル朝皇帝バーブルと
フマーユーンに関する回想録

グルバダン・ベギム
間野英二 訳注

平凡社



談するバーブル（右）とその長男フマーユーン（左）

凡例

一　本書は、十六世紀の後半、ムガル朝治下のインドで、ムガル朝第三代皇帝アクバルの求めに応じて、アクバルのおばグルバダン・ベギムがペルシア語で著した、ムガル朝初代皇帝である父バーブルと第二代皇帝である兄フマーユーンについての回想録『フマーユーンの書（フマーユーン・ナーマ）』の訳注である。

二　訳出には、Annette S. Beveridge, *The History of Humāyūn (Humāyūn-nāma) by Gul-Badan Begam (Princess Rose-Body)*. Translated with Introduction, Notes, Illustrations and Biographical Appendix and Reproduction in the Persian from the only known MS. of the British Museum, London: Royal Asiatic Society, 1902; Reprinted Indian Edition, New Delhi: Oriental Books Reprint Corporation, 1983 所収のペルシア語テキストを利用し、時にこのテキスト作成に用いられた大英図書館所蔵の唯一のペルシア語写本（Or. 166）を参照した。訳文中に、この写本の葉番号を〈3a〉〈3b〉のごとく記した。〈3a〉は三葉表、〈3b〉は三葉裏の意味である。

三　巻頭や訳の本文中に載せた図版は、ムガル朝の宮廷工房で作成された細密画である。

四　目次のあとに、ムガル朝時代初期の中央アジア、アフガニスタン、インドの地図、一三〇ページにイランの地図を付した。

五　訳の本文では、読みやすさを考慮して、ペルシア語の本文には見えない章名、見出しを、適宜、追加した。この場合に限り、追加を示す［　］は省略した。



玉座のフマーユーン

六　本文に付した訳注は本文のあとにまとめて掲載した。

七　写本では、ペルシア語本文がフマーユーンに関する記述の途中で失われているため、以後のフマーユーンの事蹟については、本文のあとに、「その後のフマーユーン」としてアブル・ファズル著『アクバルの書（アクバル・ナーマ）』に見える記述の要約を記載した。

八　巻末に、本書で参照した文献の「参考文献略称表、参考文献」、「解題」、ティムール朝とムガル朝の関係を示す「系図」を付した。また称号、度量衡など、本書中にしばしば見えるものの、読者になじみが薄いと思われる術語について、「術語解説」としてまとめてあるので、適宜、参照していただきたい。

九　約物類は次のように使用した。

〔　〕　原文には見えない、文意や年代などを理解しやすくするための追加。

（　）　語句や年代などの説明。

／「または」の意味。

《　》　会話中の会話や諺。

［　］　原文欄外の記述。

一〇　ペルシア語で khān と表記されている中央アジアのモグール、ウズベクなどの君主の称号は「ハン」と転写し、インドの王族・貴顕の称号は「ハーン」と転写した。できうる限り実際の発音に近づけたいと考えたためである。

一一　巻末に、フマーユーンに関係する「略年譜」を付したので、適宜、参照していただきたい。

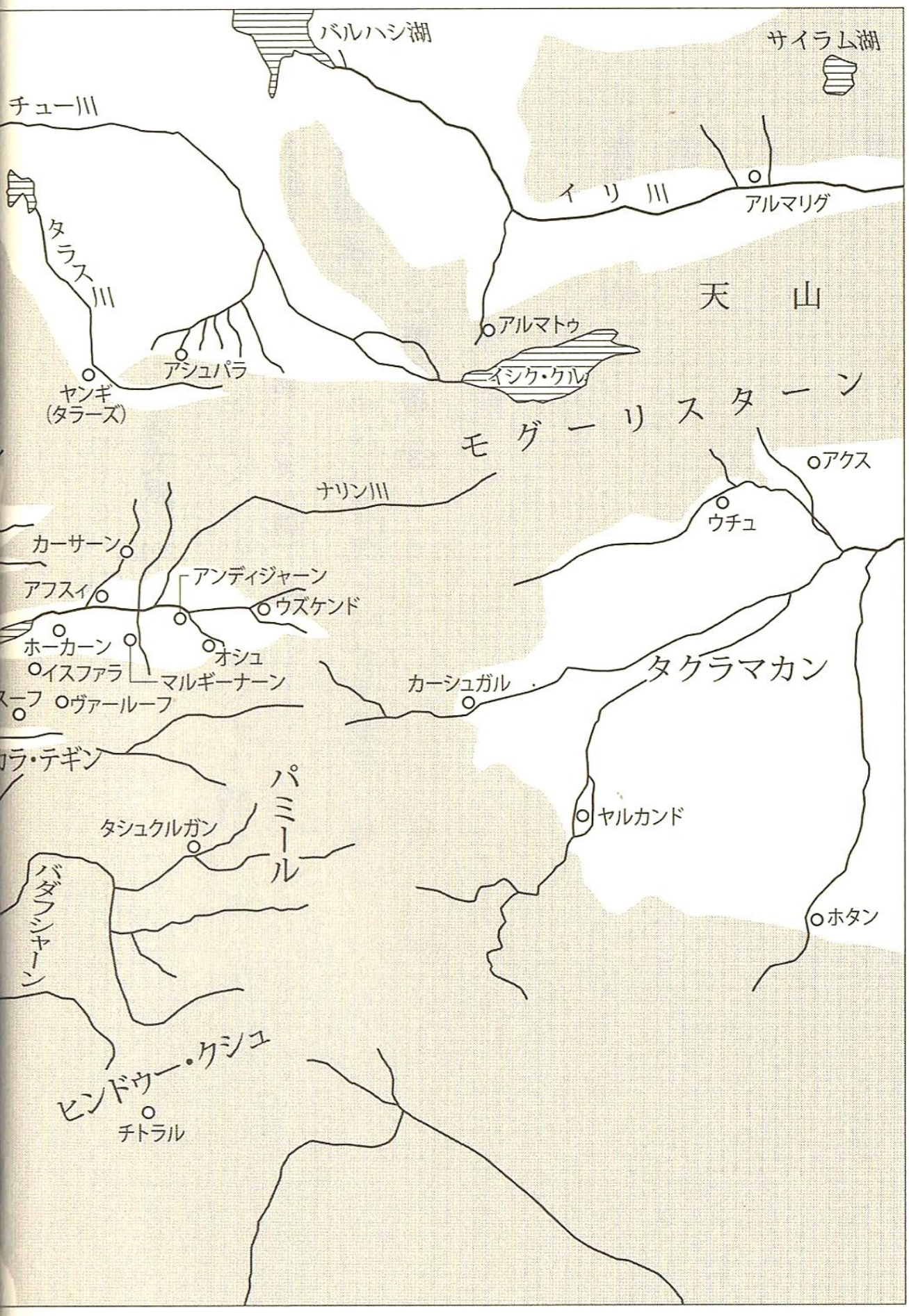
謝辞

本書の編集面では、さきに刊行した『バーブル・ナーマ――ムガル帝国創設者の回想録』全三巻に引き続き、平凡社編集部の直井祐二氏からさまざまな助力をいただいた。記して謝意を表する。

目次

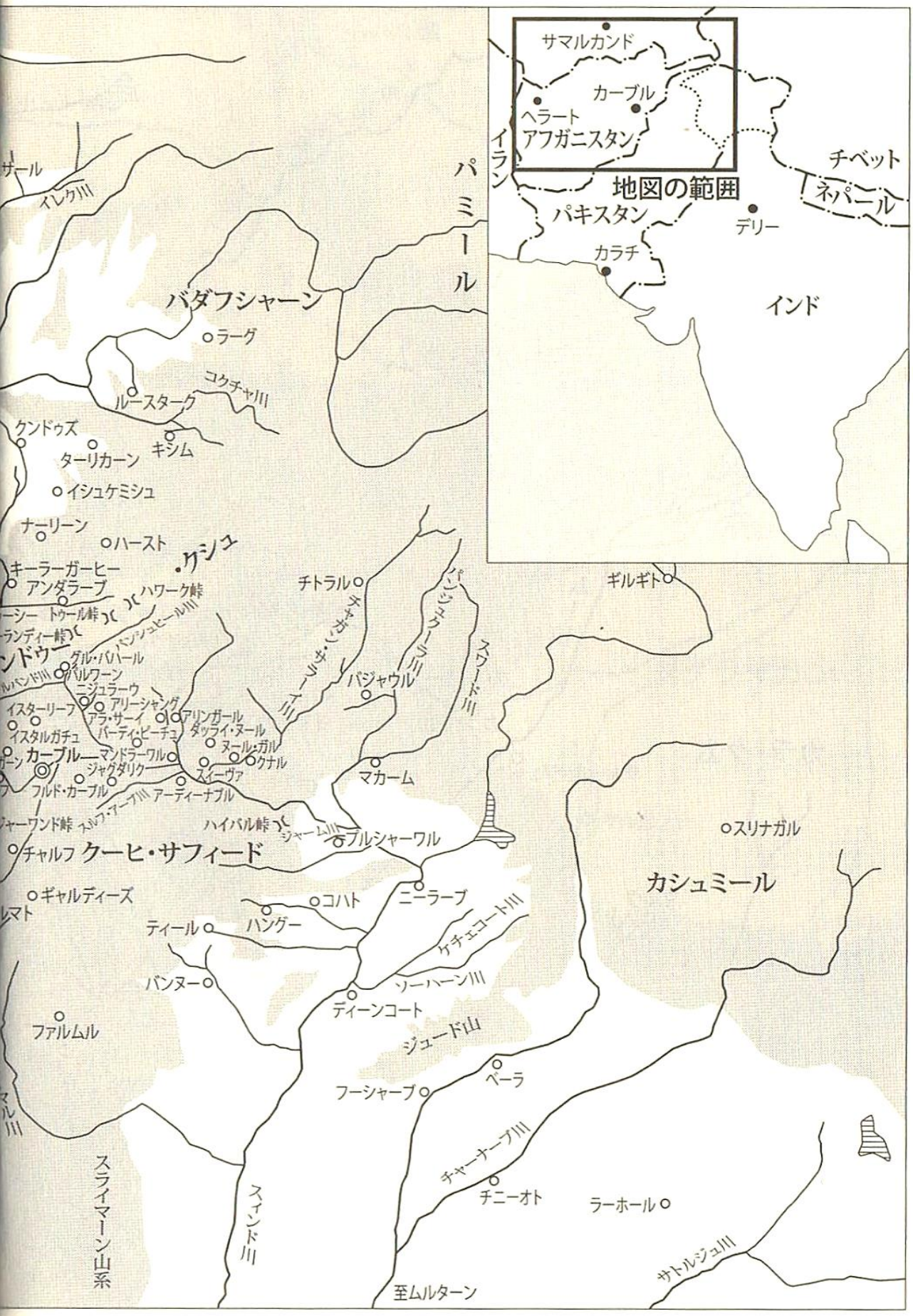
凡例　5
地図　10
序　執筆の理由　19
第一章　父バーブル・パーディシャー陛下　21
第二章　兄フマーユーン・パーディシャー陛下　59
附　その後のフマーユーン　179
130

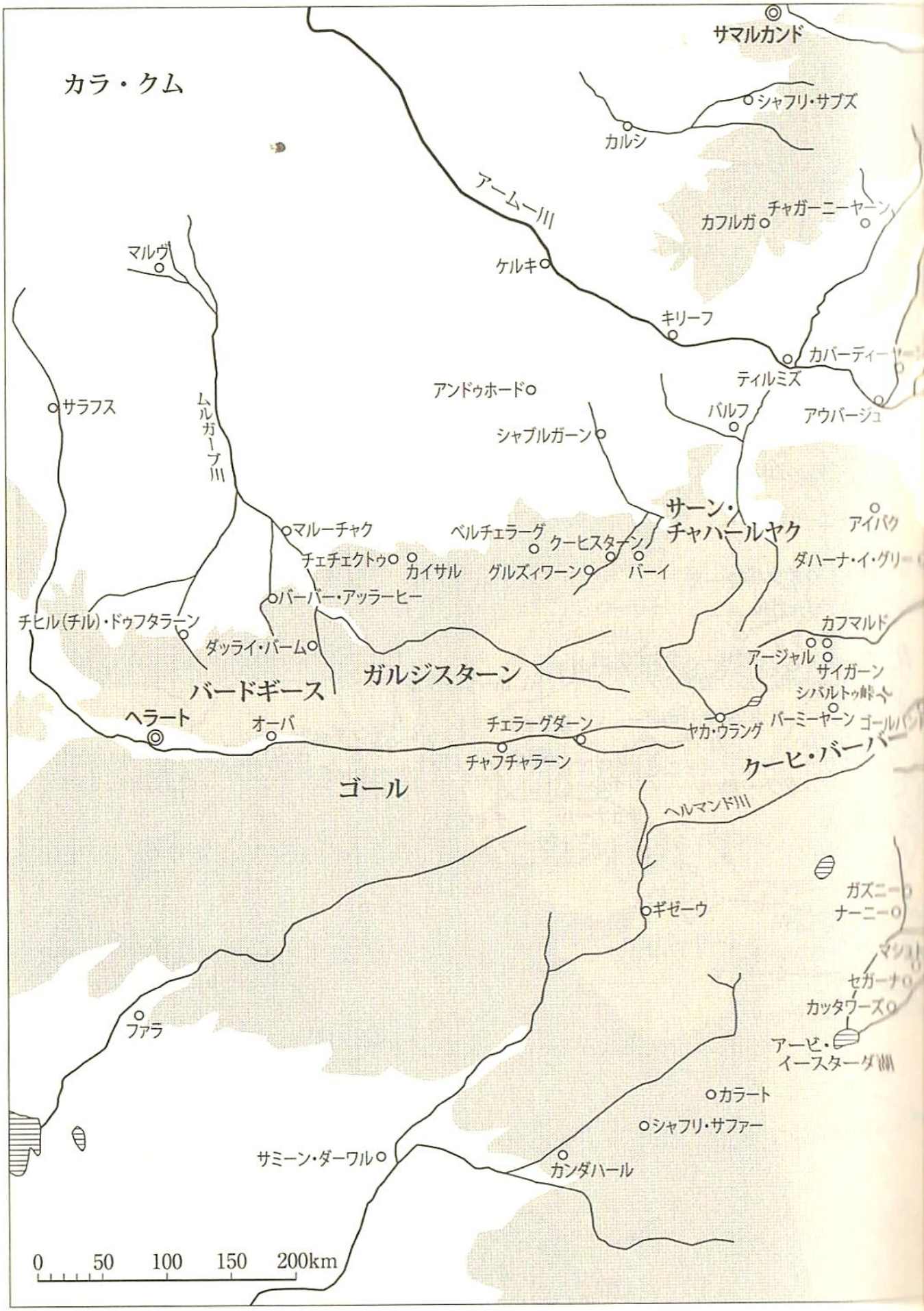
訳注　187
参考文献略称表、参考文献　291
解題　303
系図（ティムール朝、ムガル朝）　330
術語解説　332
フマーユーン略年譜　337
人名索引　347


バルハシ湖
サイラム湖
チュー川
イリ川
アルマリグ
タラス川
天山
アルマトゥ
イシク・クル
アシュパラ
ヤンギ
(タラーズ)
モグーリスターン
アクス
ナリン川
ウチュ
カーサーン
アンディジャーン
アフスィ
ウズケンド
ホーカーン
オシュ
イスファラ
マルギーナーン
ヴァールーフ
カーシュガル
タクラマカン
パミール
タシュクルガン
ヤルカンド
バダフシャーン
ホタン
ヒンドゥー・クシュ
チトラル

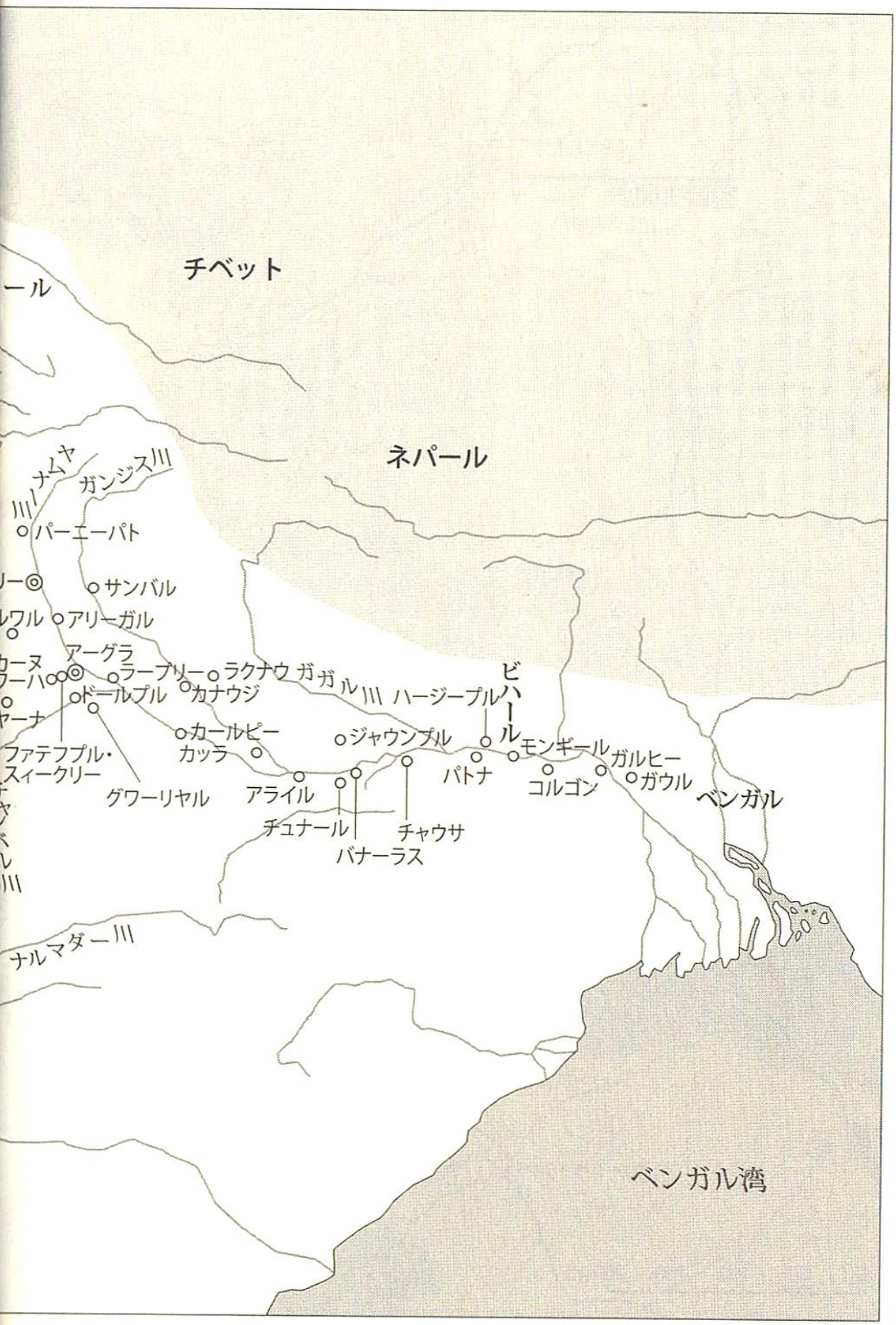

アラル海
シル川（サイフーン川）
キジル・クム
トゥルキスターン
アリス川
オトラール
サイラーム
タシュケンド
ヒヴァ
アーハーンギャラーン川
アームー川
ヌール・アタ山
シャールヒーヤ
ディザク
ホジャンド
ザーミーン
ブハーラー
サリ・プル
ウラ・テペ
カラ・キョル
サマルカンド
ユーハク川
シャウダール
カラ・クム
チャール・ジュー
シラ・タク峠
ファーン
カルシ
ケシュ
ヒサール
チャガーニーヤーン
カム・ルード
クフルガ
マルヴ
ケルキ
ティルミズ
キリーフ
アウバージュ
アンドゥホード
バルフ
クンドゥズ
サラフス
マシュハド
シャブルガーン
ヘラート
カーブル

中央アジア


サマルカンド
カーブル
ヘラート
アフガニスタン
イラン
チベット
ネパール
地図の範囲
パキスタン
デリー
カラチ
インド
パミール
バダフシャーン
ラーグ
コクチャ川
ルースターク
クンドゥズ
ターリカーン
キシム
イシュケミシュ
ナーリーン
ハースト
キーラーガーヒー
アンダラーブ
ハワーク峠
トゥール峠
ダル・バハール
バルワーン
ニジュラーウ
アリーシャング
アラ・サーイ
アリンガール
バーティ・ピーチュ
タッフィ・ヌール
ヌール・ガル
クナル
カーブル
マンドラーワル
ジャグダリク
スィーヴァ
フルド・カーブル
アーディーナブル
ハイバル峠
ジャームルド
ジャームル川
ブルシャーワル
チャルフ
クーヒ・サフィード
ギャルディーズ
コハト
ハングー
ティール
ニーラーブ
ケチェコート川
バンヌー
ソーハーン川
ディーンコート
ファルムル
ジュード山
ペーラ
フーシャーブ
チャーナーブ川
チニーオト
ラーホール
スライマーン山系
スィンド川
至ムルターン
サトルジュ川
チトラル
ギルギト
パンジュクーラ川
スワード川
バジャウル
マカーム
スリナガル
カシュミール


サマルカンド
カラ・クム
シャフリ・サブズ
カルシ
アームー川
チャガーニーヤーン
カフルガ
マルヴ
ケルキ
キリーフ
カバーディーヤーン
ティルミズ
アンドゥホード
サラフス
ムルガーブ川
バルフ
アウバージュ
シャブルガーン
サーン・チャハールヤク
アイバク
マルーチャク
ベルチェラーグ
クーヒスターン
ダハーナ・イ・グリー
チェチェクトゥ
カイサル
グルズィワーン
バーイ
バーバー・アッラーヒー
チヒル(チル)・ドゥフタラーン
カフマルド
ダッライ・バーム
アージャル
サイガーン
ガルジスターン
シバルトゥ峠
バードギース
ヘラート
オーバ
チェラーグダーン
ヤカ・ウラング
バーミーヤーン
ゴールバンド
チャフチャラーン
クーヒ・バーバー
ゴール
ヘルマンド川
ガズニー
ギゼーウ
ナーニー
セガーナ
カッタワーズ
ファラ
アービ・イースタールダ湖
カラート
シャフリ・サファー
サミーン・ダーワル
カンダハール
0 50 100 150 200km

アフガニスタン


チベット
ネパール
ガンジス川
パーエーパト
サンバル
アリーガル
アーグラ
ラープリー
ラクナウ
ガガル川
ハージープル
ビハール
ドールプル
カナウジ
カールピー
カッラ
ジャウンプル
モンギール
ガルヒー
ガウル
ファテフプル・スィークリー
グワーリヤル
アライル
パトナ
コルゴン
ベンガル
チュナール
チャウサ
バナーラス
ナルマダー川
ベンガル湾


ヒンドゥークシュ
クンドゥズ
バルフ
バダフシャーン
カルア・イ・ザファル
ターリカーン
キシム
イシュケミシュ
アンダラーブ
キプチャク峠
チャーリカラーン
ゴールバンド
カラ・バーグ
バジャウル
イスターリーフ
ラグマーン
ナンガルハール
カーブル
ヘラート
チャフチャラーン
ハイバル峠
ジューイ・バ
シャーヒー
ガズニ
ファラー
ベーラ川
スィアールコート
カラート
カンダハール
ラーホール
シースターン
パンジャーブ
ムルターン
クウェッタ
スィーヴィー
バルーチスターン
ラージャスターン
ローリー
バッカル
ビーカーニール
ジャイサルメール
サタルメール
セフワーン
ジョードプル
スィンド
タッタ
ジューン
オマルコート
マンダソール
パタン
アフマダーバード
チャンパーネール
カンバーヤート
バロダ
グジャラート
スーラト
アラビア海

アフガニスタン・インド

フマーユーン・ナーマ

ムガル朝皇帝バーブルとフマーユーンに関する回想録

グルバダン・ベギム
間野英二（まのえいじ）訳注

序　執筆の理由

〈2b〉フィルダウス・マカーニー[1]（＝著者グルバダン・ベギムの父で、ムガル朝[2]初代の皇帝バーブル）とジャンナト・アーシュヤーニー陛下[3]（＝バーブルの長男。著者の兄で、ムガル朝第二代の皇帝フマーユーン）の事蹟について覚えていることをすべて書くようにとの命令が〔フマーユーンの長男で、著者のおいであるムガル朝第三代の皇帝アクバルから〕出されていた[4]。

フィルダウス・マカーニー陛下が〔一五三〇年一二月二六日〕はかなき世（＝現世）から永遠の世（＝来世）へと進まれた時、この卑しき私[5]は八歳[6]であった。そのため記すべき事蹟は少ししか覚えていなかった。しかし陛下（＝アクバル）のご命令に従って、聞いたことや覚えていることをすべて書き記すことにした。

第一章　父バーブル・パーディシャー[1]陛下

この書の最初にわが父陛下の事蹟を記すことにした。以下に記すことは、わが父陛下の『事蹟録（ワーキア・ナーマ）』（＝通称『バーブル・ナーマ』[2]）に書かれている。しかし、幸せを呼び寄せ、祝福をもたらすものとして、〔父陛下の事蹟を私の手でも〕書き記すことにした。

サーヒブ・キラーン[3]陛下（＝ティムール）の時代からフィルダウス・マカーニー（＝バーブル）の時代まで、過去のスルターンたちのうち、誰もこのお方のように奮励努力された方はおられない。

即位　〔わが父陛下はヒジュラ暦による数えの〕十二歳で君主（パーディシャー）となられた。〔ヒジュラ暦〕九〇九年[4]の幸多きラマザーン月五日（西暦一五〇三年一〇月二六日）、〔ティムール朝〕フェルガーナ領国の首都であった〈3a〉〔現ウズベキスタン共和国東部の〕アンディジャーン地方でフトバ[5]が詠まれた。〔陛下は〕一一年間[6]、ずっとマー・ワラー・アン・ナフル[7]地方でチャ

ガタイ家[8]、ティムール家[9]、ウズベク族[10]のスルターンたちとの戦争や闘争に終始されたが、筆で記される言葉はその詳細を述べるにはあまりにも無能・無力である。世界征服に関し私たちの陛下が体験されたほどの困難や危機を体験したのはごくわずかの人々のみであろう。またかの陛下が戦争や戦闘で示された勇敢さ・男らしさ、忍耐強さに匹敵するものについて語られている君主もまれである。

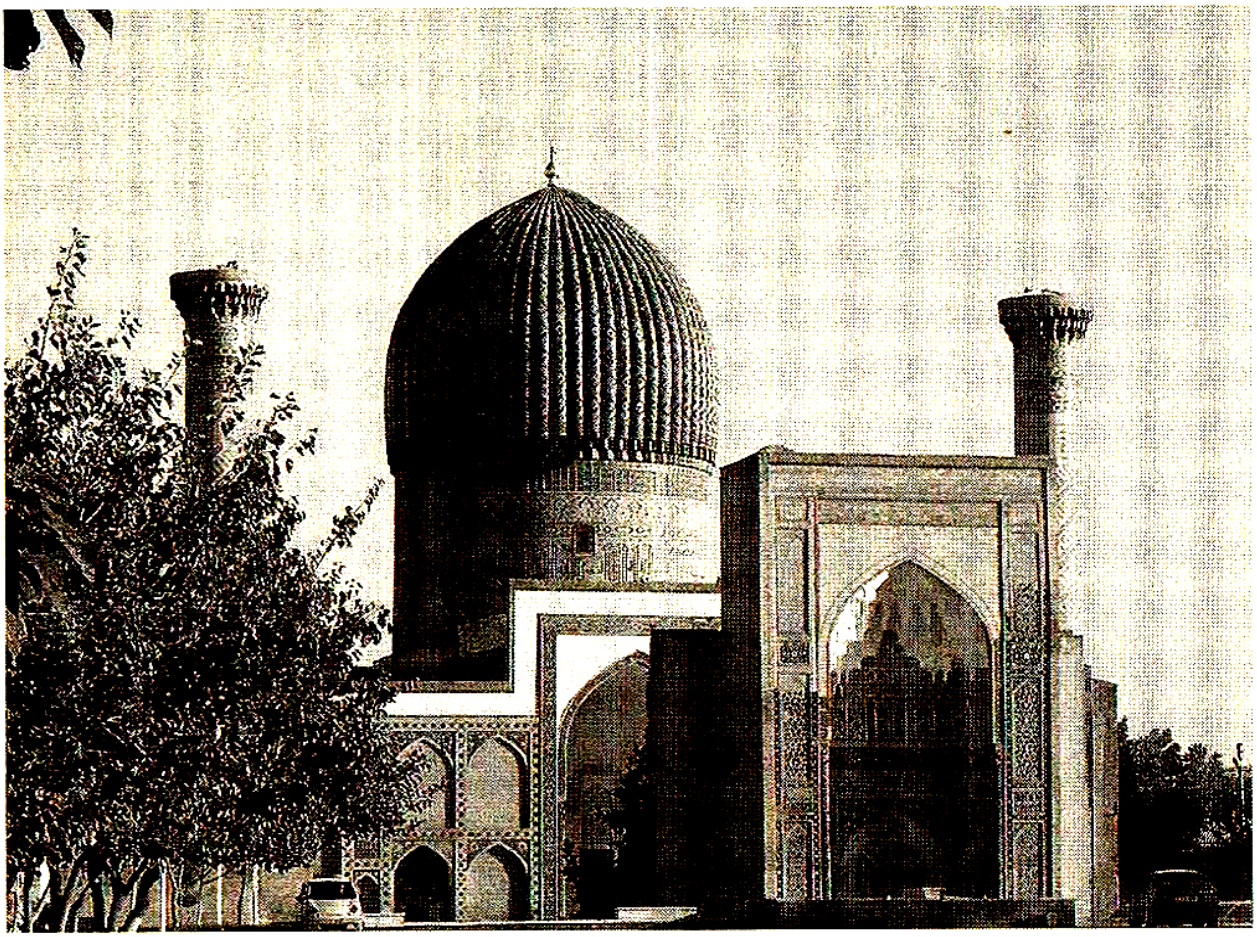
二度、刀を振るって〔ティムールが都とし、ティムール朝の君主が支配した中央アジアの中心都市〕サマルカンドを征服された。

一回目、〔無血入城を果たした一四九七年〕わが父陛下は十二歳[11]であらせられた。二回目〔一五〇〇年〕は十九歳[12]であらせられた。三回目〔一五一一年〕は二十二歳[13]であらせられた。〔その二回目には〕六カ月間[14]、〔ウズベクのシャイバーニー・ハンにサマルカンドを〕包囲された。その父方のおじである〔ティムール朝ヘラート政権[15]の初代の君主〕スルターン・フサイン・ミールザー・イ・バーイカラー[16]はホラーサーン[17]におられたが、かのお方に援軍を送られなかった。かのお方の母方のおじである〔モグーリスターン・ハン国の君主〕スルターン・マフムード・ハンはカーシュガルにおられたが[18]、この方も援軍を送られなかった。どこからも援軍、援助が来なかったため、絶望された。

このような時に〔包囲していた〕シャーヒー・ベグ・ハン（＝シャイバーニー・ハン[19]）が使者を送ってきて、「もしも、〈3b〉そなた自身の姉であるハンザーダ・ベギムを私に娶（めと）らせるなら、



書物を手に庭園に座るバーブル



サマルカンドのティムール一族の霊廟グーリ・アミール

我々とそなたとの間に和平が成立し、同盟関係が生まれるであろう」といった。

ついに、〔父陛下は〕必要に迫られて、ハンザーダ・ベギムをハンに娶らせ[20]、徒歩で、肩にみすぼらしい長衣をはおり、足には粗末な短靴を履き、手に杖を持った[21]二〇〇人の部下とともに、ご自身は〔サマルカンドを〕出立された。このように武器も持たず、神を頼りに、バダフシャーナート（バダフシャーン）とカーブルへと向かわれた[22]。

クンドゥズとバダフシャーナートにはホスロー・シャー[23]の軍と兵士がいた。ホスロー・シャーは来て、わが父パーディシャー陛下に臣従した。

ホスロー・シャーは、かつてバイスングル・ミールザー[24]を殺害し、スルターン・マスウード・ミールザー[25]の目に焼けた鉄の棒



バーブルに臣従するホスロー・シャー

を当てて盲目にするがごとき罪を犯していた。この二人のミールザーはわが父パーディシャー陛下のおじのご子息（＝いとこ）であった。これ以前にも、かの陛下がその空位の時代にホスロー・シャーの領地を通過され、必要に迫られてそのもとに行かれたことがある。ホスロー・シャーは冷酷、かつぞんざいに扱い、その領地からかの陛下を放逐した。それにもかかわらず、パーディシャー陛下は、理解力があり、人間性に富み、男らしい方であられたので、〔ホスロー・シャーが臣従してくると〕その復讐をしようなどとは少しもお考えにならず、望むだけの宝石や金品を持っていくようにとお命じになった。ホスロー・シャーは五、六連のラクダ、五、六連のラバに積んだ荷とともに〈ta〉平安無事に退去の許しを得て、ホラーサーンに向かった。パーディシャー陛下はカーブルに向かわれた。

カーブルの征服

当時、カーブルの支配権をナーヒード・ベギム[26]の〔母方の〕祖父であるズー・ン・ヌーン・アルグン[27]の子のムハンマド・ムキームが所有していた。彼は〔ティムール朝の王子であった〕ウルグ・ベグ・ミールザー[28]の没後、〔その子〕アブドゥ・ル・ラッザーク・ミールザーから〔カーブルを〕奪った。このアブドゥ・ル・ラッザーク・ミールザーは陛下のいとこ[29]であった。陛下は〔一五〇四年〕幸運裡にカーブルに到着された。

ムハンマド・ムキームは二、三日、城にこもった。数日後、盟約と約定によってカーブルをパーディシャー陛下の部下たちに引き渡し、自分の財貨や所持品を持ってカンダハールにいるその父のもとへと赴いた。カーブルの征服は九一〇年ラビーゥッ・サーニー月下旬（一五〇四

年一〇月）である。

カーブルの領有ののち〔一五〇五年一／二月〕バンガシュへ行かれた[30]。多くの戦利品を獲得してカーブルに帰られた。

母の死　パーディシャー陛下の母上であるハニム皇太后陛下[31]が〔一五〇五年六／七月〕六日間熱病に冒され、はかなき世（＝現世）から永遠の世（来世）へと旅立たれた。ハニム皇太后陛下をナウ・ルーズィー庭園（＝新年の園）に安置された。庭園の所有者であるワイサル・アネケの人々[32]には一〇〇〇ミスカール（およそ四五〇〇グラム）のタンガ（銀貨）が渡され、〔ハニムの亡骸が〕その庭園に安置された[33]。

ヘラートに赴く　この間に〔ティムール朝ヘラート政権の君主である〕スルターン・フサイン・ミールザーの緊急のいくつかの命令書が到着した。それらには、「我々は〈45〉ウズベクと戦う考えを持っている。もし、そなたも来られるなら、まことに素晴らしい」とあった。陛下はそのこと（ティムール朝の総力を挙げてウズベクと戦うこと）を常に神に願っておられた。結局、彼らのもとへと向かわれた。道中でスルターン・フサイン・ミールザーが〔一五〇六年四／五月〕鷹になられた[34]（＝死去した）という知らせが届いた。パーディシャー陛下のアミールたちは「スルターン・フサイン・ミールザーが鷹になられたからには、引き返し、カーブルに戻られるのがよろしいでしょう」と上奏した。陛下は「我々はすでにこれだけの道を進んできたのだから、行ってミールザーに対する哀悼の意を表そう」といわれた。結局、ホラーサーンに向か

ISBN978-4-582-80912-1
C0122 ¥3500E



定価：本体3,500円（税別）



